

第二節 銀山川流域

一、小柳津

(一) 村名の発祥と地域性

『新編会津風土記』によると、

「大同年中柳津虚空蔵堂を造営せしとき、此地に小屋を構て工匠の居所とす。其の小屋を家居としひらきし村なれば、柳津村に対して小柳津村と名づけしとぞ」

とある。山に囲まれて、繫川つづみのV字形の河谷に発達した集落で、虚空蔵尊とともに古いところである。この地に佐藤熊三氏の『小柳津村誌』という文献がある。それらの内容からもこの集落の資料として、利用させて貰うことにする。小柳津の現地は、古い時代は、鳥屋山主峯とその対峙峯「白バツケ山」の間で、この山の自然災害で地切りがおき、V字谷を埋め、何回か繰返された土地が集落周辺の土地であろう。そのため岩盤上に堆積した相当厚い層土であるため伏流水は留まる点がなく流失して谷へ出る。このため井戸をほっても十分水を汲み上げることが不可能で、「井戸は掘るな」という伝承が長く続いた。一時は山崩土砂で繫川を堰とめ、小沼となったこともあったろうと、地質調査で推考された。字沼所に真田藤松が大正年間に分家して、その地が沼であったところとて、この分家を今

でも「沼の家」という。しかし山麓にはいくつかの清水がある。愛宕山下の清水、板沢の清水、後山系の清水、中屋敷の清水などで親しまれ、人々の用水、灌漑水に利用されてきた。戦後は家庭毎にホームポンプの施設もひろまり、主婦の社交場であった、中屋敷清水の全戸共同使用の風習はなくなってしまった。

(二) 農耕の変遷

こうした条件の中で、長年耕地の開拓に励んだ。

寛文五年（一六六五）には、家五軒・竈五・人口二十七人・馬三匹の小集落で、水田一町四反三畝、畑四町四反八畝三步になっていた。村高は、三十三石二斗五升で、年貢米は金納で五兩九分四厘であり、小役納は銀四匁二分七厘七毛、そのほか、綿役・糠藁役・足前役・山役・松葉役と割当られている。御役漆木は二二一本あった家業は薪つくりと葛ノ葉をとって商い、そのほか栗・梨・梅・胡桃くるも等も栽培して年貢の助としていた。

山も、周り三里の地が利用の山で、鳥獣のほか、草花や山菜に恵まれて、四季の変化をよろこびながら送迎していた。

江戸中期を下ると、水田三町六反三畝一七歩で、畑六町四反六畝十一歩と拡大され、この村高一七石四斗六升三合（新田を含む）となる。しかし戸数は未だ六戸で竈は七・馬五足・人口は四十七人となった。耕地人口が殖えると、年貢もあがり、年貢米四十六石八斗二升三合の物納となり、其の他の諸役も高額になった。

現在は戸数七戸・人口二十八人の小集落で、水田五・〇七ヘクタ

ール、畑三・七二ヘクタール、山林八六・二〇ヘクタールで、一戸平均耕作地も割合広く、立地上やはり、機械農業化している。

明治初期に軽井沢銀山の再開のとき、ヤゲン沢（六十刈）から亜炭を採掘して燃料として送った。このときの遺形が今でもよくみえる。幕末の弘化四年（一八四七）には、佐々木三郎氏が大窪の一・六ヘクタールを独立で開いた。そこへ陸作物と一部水田にして稲作も栽培した。これらの耕地は稲作と葉煙草その他雑穀を作り、薬用人参は昔のような規模の面影はない。

昭和三十五年頃の水田六ヘクタール、畑五ヘクタールと山を最大効率のあがるように利用する合理的経営が、ヤング達の手を中心に進められている。

(三) 小柳津の災害

ここで災害のことにふれておく。昭和三十一年七月十七日の大洪水には繫川が氾濫して、この沿岸の耕地一・五ヘクタールが流失し翌々三十三年の台風二十一号〜二十二号でも、農地作物等に大被害をうけたが、一致協力して復興に努め現状のように耕地の確保ができた。

(四) 小柳津の神仏

菩提寺は柳津門前町の真言宗月光寺である。また村中に子安観音堂があり、本尊は石像で子を右抱きしている。十何枚もの子供の着物、涎掛、帽子が寄進され信仰の深いことを知る。この地藏尊は左乳内部と陰部が削りとられている。婦人の悲願の強烈さを示すみ



子安観音像(石像)



子育観音(旧本尊)

仏として、実に重要な文化遺産である。それは多分産婦が母乳の不足に困り、乳量の多かれと祈願とした御護符として内部深く削りつけたものであり、陰部の削りは、「若妻が嫁して三年経てど子なきは去るべし」の女大学の教訓に恐れ、ここを削りとって浴槽に入れ子授けの護符としたものと思われる。最近も祈願文が奉られてあった。また堂内の厨子の観音像は、古い本尊と思われる。鎮守は村下

の鬼渡神社である。寛文のころは社殿が廢れていたが、現在の勧請は延宝三年（一六七五）である。勧請札は左の如し、

延宝三年乙卯三月吉日
 鬼渡神 陸奥州河沼郡在旧黒滝村
 蔵王主神

即ちこの神社は黒滝から移祀したことを証している。この他に、前に愛宕神社（彦火火出見命）、雷神社（大雷神↓村東）にあり、旧六月二十四日が例祭であった。

集落から降りて来た曲り角に、「なできり地蔵尊」がまつられてある。字下新田のV字谷の急傾斜の近くで、冬は雪崩れの危険の多発地で、住む人々、通る旅の人たちは、この地藏尊に祈願をこめると、絶対雪崩の難にあわないと伝承されてきた。高さ八十センチメートルで万延元年（一六八〇）ころ最初に祭ったという。

(五) 『寛文五年万改帳』にみる小柳津

小柳津村（若松ヨリ西行程四十里）

- 一、此村東西三十間南北十八間家居南向キ後ニ小河ヲ隔山在リ。
- 東西ニ田畠、南ニ畠有テ、山居地窪ニ在リ。小柳津村調、大同二年ニ柳津虚空蔵堂建立ス、其時此処ニテ材木ヲケズル小屋場ナリ。此小屋ヲ住所トナスニ仍テ小柳津村ト名付ル。
- 一、家五軒、竈五ツ、男十七人、女十人、馬三疋、年々増減有リ
- 一、田方一町四畝三歩、内三反土色白砂土、二反土色黒野土、三

反土色赤砂土、一反二畝土色白子^バ土、一反二畝三歩土色白真土、六反二畝下ノ上、二反二畝下ノ中。二反三歩下ノ下。並シ下ノ中。

一、畠方四町四反八畝三歩、内三反二畝土色真土、三反五畝土色白砂土、九反二畝三歩土色黒野土、九反二畝土色小石交ノ黒野土、一町九反七畝土色黒ス土。五反一畝下ノ上、一町九畝三歩下ノ中、二町八反八畝下ノ下、並シ下ノ中。

一、早稲少、糯稻少晚稻中、大麦、小麦、大豆、大角豆、蕎麦、芋、粟、稗、麻、タバコ、胡麻、油荳、菜、大根

外ニ野蒜、アサツキ、款冬、ヂシバリ有リ。

一、高三十三石二斗五升、内三十二石九斗本田、三斗五升新田、此取十六石二斗二升八合、免四ツ八分八厘、年々増減アリ。

一、年貢、金五両一分銀八匁四厘、年々増減アリ。小役銀四匁二

粉七厘七毛 綿 役

同銀五匁三分二厘 糠藁

同八百五十六文 足前

同金一分銀十二匁六分四厘 山役

同錢二百七十文 松葉サライ

漆二百二十一本 役漆木此漆二盃二合一勺

納有リ、漆ノ外不足ノ分毎年金子ヲ以納ル。四メ六百四十一匁御役蠟本ノ木不足故蠟ノ未進積リ十三年以前ヨリ大買蠟小買蠟御赦免。然トモ毎春漆実霜ニ逢年々未進アリ。

一、此村之宮。薪ヲ伐、葛ノ葉ヲ取商売ス。

一、粟 梨 梅 胡桃

一、神社 座王権現旧跡

村ノ乾三町二十間隔山ノ中ニアリ、開塞不知社ナシ。何レ

ノ比ヨリ怠頓スト云コト不明、杉榎有リ。然トモ毎春漆実

霜ニ逢年々未進アリ。

一、山 在所ノ四方ニアリ、周リ三里、麓ヨリ頂ニ至テ五十丈、

東西へ一里、南北へ三町、頂上ヲ鷹鳥屋ト云所在之、草木禽獸

ハ萱。百合草、桔梗、苜、蓬、款冬、女郎花、イハタラ、独活

葛、蕨、萩松、粟、檜、桜、柳、ウツギ、ハナノ木、山鳥、鳩

郭公、鶯、シトト、狐、狸、兎アリ。

一、川 村ヨリ北一町ニ小河アリ、水上ハ大野山ヨリ出下流ス。

此川ヲ堰ニ上ケ田方ノ養水トナス。西へ流テ銀山ノ銀洗川ト落

合フ。濁水故魚ナシ。

(六) 『天和元年(一六八一)書上帳』による小柳津

小柳津村 肝煎半之助、倅和吉

高一七石四斗六升三合 本田・新田・免四ツ

田 四十二石六斗九升八合 此反別 三町六反三畝十七步

畑 二十七石九斗三升二合 此反別 六町四反六畝十一步

高四十六石八斗二升三合 新田

人数四十五人(男二十二人、女二十三人)

家数 六軒但七籠、馬五疋

一、綿役 銀 九匁一分八厘二毛

一、糠藁役 金 一分 銀二匁七分九厘四毛

一、足前銭 一貫八三六匁

一、山役 金一分 銀十二匁六分四厘

一、漆木 二二〇本九分

一、漆目 二盃二合九才

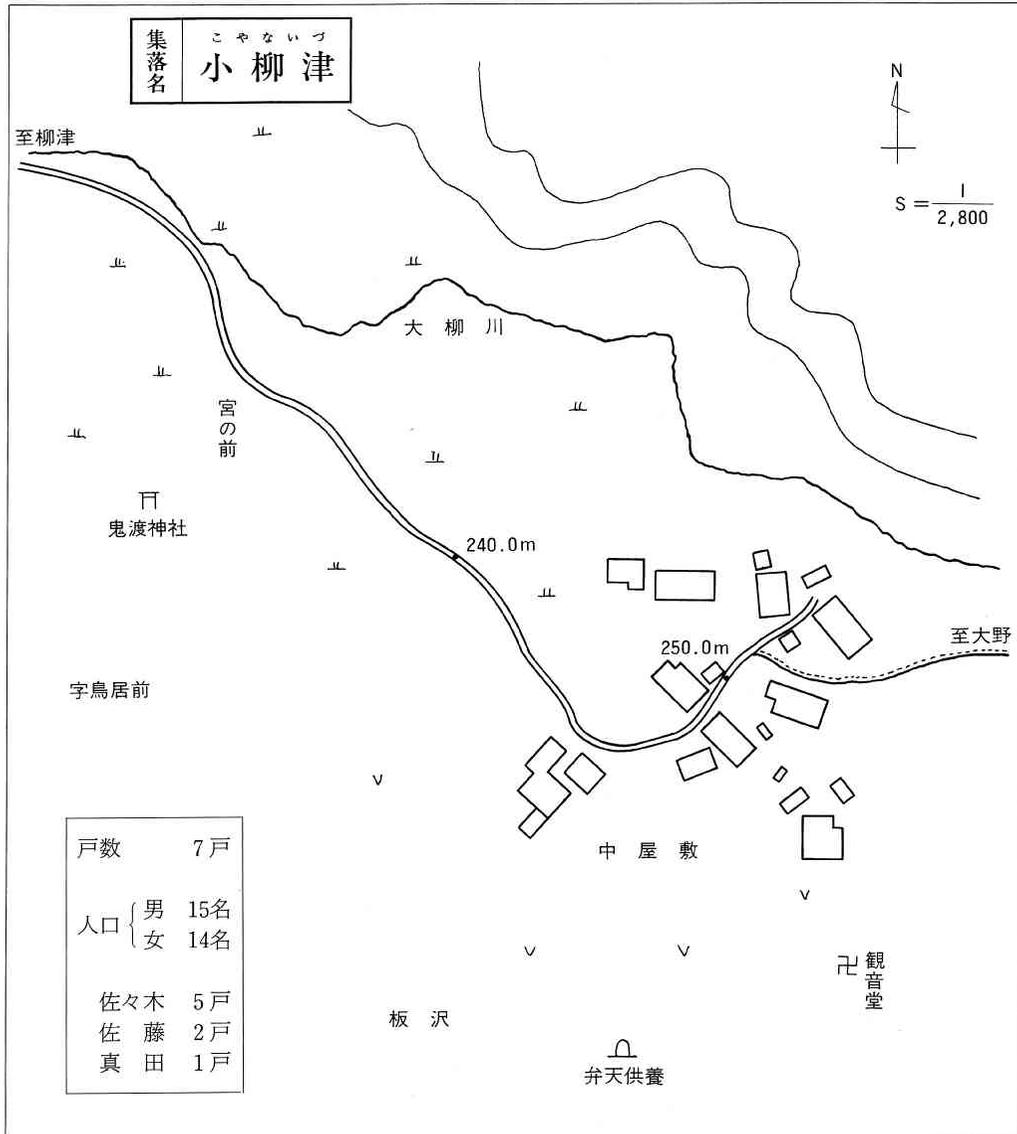
一、蛭目 九貫四九九匁

内 御年貢蛭 四貫六三九匁

大買蛭 三貫九十三匁

小買蛭 一貫七六七匁

神社 鬼渡神社 座王権現



二、大野新田

(一) 村の成りたちと産業

大野新田は寛永(一六二四～四二)年間に、大野村の農民が山地を開拓したと記録している。

寛永二十年は、保科正之公入部の年で、正之公の農民政策によって開拓が進められ、非常に多くの新田村が創り出された。この影響によって大野村の人が、ここに入植したのはこうした社会情勢によるものであろう。まず大山祇の神を鎮守として、茨を伐り住家を建て、山幸を希うたことは、ここへ新天地を求めた初代の人でなければわからない。

畑を作り、沢水を堤として、稲作を考えて黙々とこの地に文化の風を吹かせて行った。文化五年に戸数六戸であった。その後の戸数十戸、この頃の水田四反四畝歩、畑二町七反二十歩の耕作に成功している。このときの年貢は、田畑物で二十石二斗三升七合となって四十四人の人口が、馬五頭、牛一頭を家畜として飼っている。

綿役銀二匁一分八厘、糠藁役銀五匁八分九厘、足前銭四三六文を納付している。漆の役木はなかったので、年貢漆と同蝸は割当がない。

昭和三十五年には、戸数八戸になって、木炭はおよそ一千貫を産出している。また大小豆、雑穀、換金作物の煙草耕作などで、戦後は驚くほどの生活向上を遂げ、昭和二十三年には沼山地区から電灯

を架設して明るい地域となり、文化はにわかに向上した。

現在は高度経済の近代社会に添うて、冬季節は青壮年の出稼による農外収入も多きい。戸数五戸、人口二十四人である。また水田一・七二ヘクタール、畑二・八二ヘクタール、山林四・九ヘクタールあり、山菜にも恵まれている。

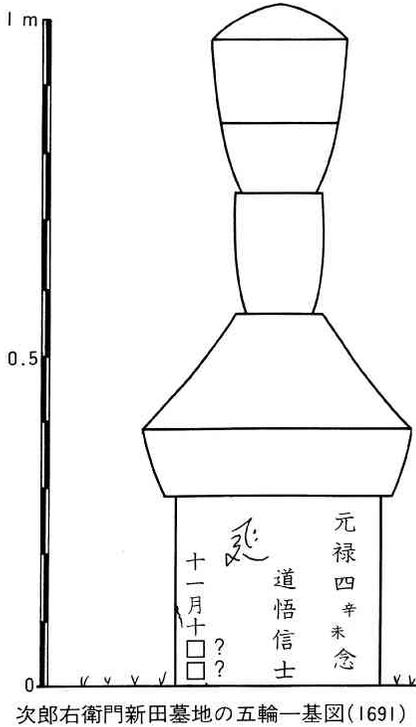
食糧はほとんど自給自足、隣保相互の精神の結びつきは堅い。

この地区の南東にほぼ二キロメートル離れたところに、次郎右衛門新田がある。こ

も延室(一六七三～八〇)のころ次郎右衛門が最初に開田したところである。水田、畑の耕地も相当ある。だんだん戸数もふえて、三戸あったが、現在はもう住居跡(二戸)はあるが住む人もいない。白井・長谷川角田の三姓であったが、白井家が最



次郎右衛新田の白井家



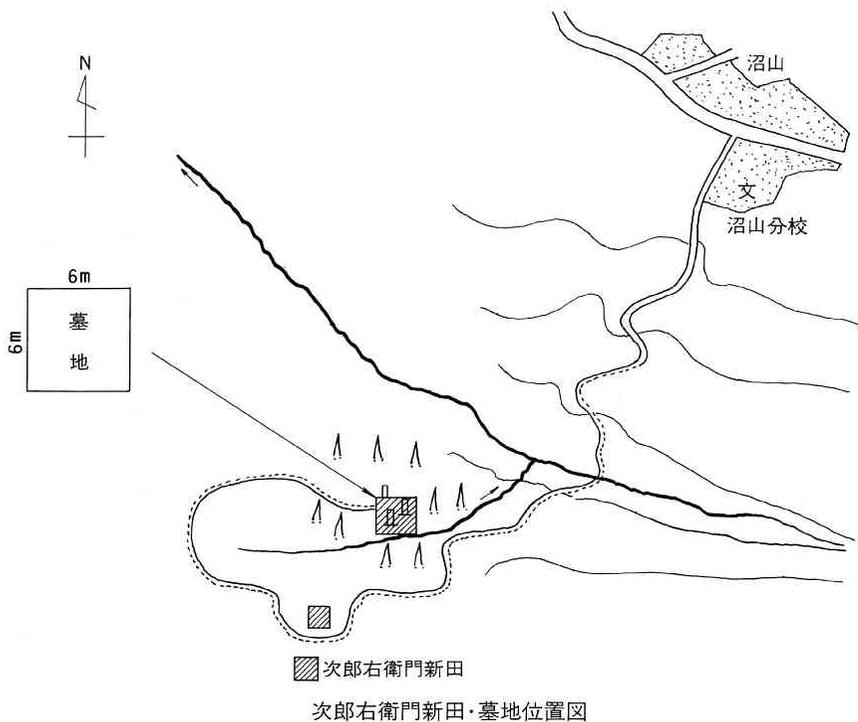
次郎右衛門新田墓地の五輪一基図(1691)



白井家の小舎と大柿の木

後までここに住んでいた。しかし昭和四十八年ころ移転し去った。

この次郎右衛門新田の祖は、元禄四年に死亡していると推考される。次郎右衛門新田墓地の十数基のうちで、左の五輪一基がある。これだけの追善建碑を表わ



次郎右衛門新田・墓地位置図

したのは、どう考えても開田の鼻祖ではないだろうか。後のために掲げておく。この墓碑のある沢が水田で、三百余年の昔に、一鋤ずつおこした首がきこえるような感慨にふける。

(二) 人々と信仰

大野新田の稲作耕作がすすむにつれて、稲荷神社も奉祀する。天保十四年（一八四三）九月九日に勧請した勧請札が納められている。これによって、農耕の進んだことを知ることもできる。寺は大野から分家したので、浄土宗光泉寺である。



地藏堂(屋根飾りに特徴あり)

この新田に、なで地藏尊がまつられてある。立地条件から冬季は雪崩の危険を侵して諸用をたさねばならぬ。そのため六面地藏尊を本尊として、村人が山を越すとき必ず雪崩の危難にあわしめぬようと祈願をこめている。拝殿は一方吹とおしであること、「グシ」に特別な山村の建築手法を用いているのは、素朴さを一層深く感ぜしめる。

講中は以前はいろいろ行われていたが、現在は「山ノ神講」を春秋に、「古峯ヶ原」が現存し、更に南山田島の田出宇賀神社信仰として、「祇園講」があり、二つの講は代参制を続けている。

(三) 教育

教育では、小学校は大柳分校と本校、中学校は寄宿舎を用いて柳

津中学校で勉強している。

また、次郎右衛門新田は、小中学校とも新鶴小学校仏沢分校に、中学校は新鶴中学校にそれぞれ委託制をとっていたのであった。

(四) 『寛文五年万改帳』による大野新田

大野 新田 村(西行程二十八里)

一、此村南北二十間、東西三十間、家居南向キ東西へ並、西北八畝ヲ隔テ山有リ、中ニ若松ヨリ柳津へノ海道有リ、是ハ三十七年以前ニ大野村ヨリ新田ニ出ル。

一、家四軒、竈四ツ、男十一人、女九人、馬二疋年々増減有リ。



六面地藏尊(本尊)

一、田方三反一畝二十歩、内二反一畝土色白子バ土。一反二十歩土色黒野土、並シ下ノ下。

一、畠方一町五反八畝十五歩、内四反八畝十一歩土色黒野土、一町一反四歩土色黒ス土。並シ下ノ下。

一、晩稻、大麦・小麦・大豆・小豆・油荳・麻・芋・蕎麥・菜・大根・粟・稗、外野蒜・款冬・茅アリ。

一、高十二石六斗二合新田、此取五斗九升六合、免四分味年々増減アリ。

一、年貢 銀十二匁六分二厘年々増減アリ。
内大豆七斗・油荳四升ニテ納。年々増減アリ。

一、小役 銀二匁一厘六毛 糠藁役

一、桑 少々有り、蚕養ス。

一、村ノ宮 薪ヲ伐リ少商売ス。

(五) 『天和元年(一六八一)書上帳』

大野 新田 肝煎仮役 清内

高三十七石一升一合 本田・新田免一ツ一分

内田五石五斗一升四合 此反別四反四畝

畑十一石五斗三升 此反別二町七反二十歩

高二十石二斗三升七合 新田

人数四十四人 (内男二十三人、女二十一人)

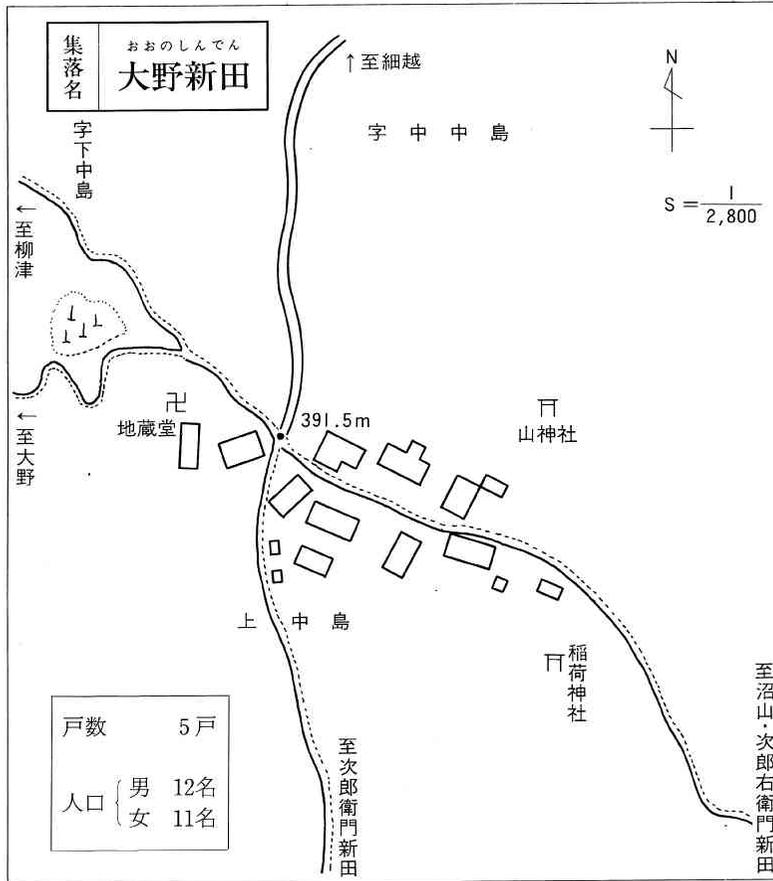
家數十軒 但十竈、馬五疋、牛一疋

一、綿役 銀二匁一分八厘

一、糠役 銀五匁八分九厘

一、足前役 四三六文

一、漆役 なし



三、大野

(一) 地名の由来

大野は伝承によると、平安初期に集落がつくりはじめられたという。徳一が柳津虚空藏堂を建立しようとして、その用材の巨木をこの山地に求めて、匠（大工）や木樵をここへ遣して、その資材を徴発したのが、大同（八〇六〜九）のころという。大寺の恵日寺造寺司の一組と地方の人たちが、この山林にわけ入ったのであろう。

その後、虚空藏堂の建築が終わっても、この人たちの一部が住みつき、野を拓いたのが大野村だと記録されている。大野は広い野原の意かも知れぬ。

(二) 大野の農耕

そのころ、平地で広く且つ日照のよい地点を畑とし、水利のよい地は水田として高冷地（標高四〇〇メートル）ではあるが、稲作への情熱を燃やしたのであろう。

江戸時代の寛文五年（一六六五）には、戸数二十四戸、竈二十四で、人口一一人、馬六頭であった。三百三十余年前に、すでに水田九反二十四歩、畑十七町二反三畝二十七歩という開拓に成功している。この村高一二五石三斗五升二合、年貢金十七兩二分の外に大豆・油荏なども上納している。

灌漑水のために宝曆（一七五一〜六三）のころ、堤を築いた。南東二キロメートルの地に周り八十間の溜池である。

自給自足主義の生活なので、農作物の陸物はバラエティーに富んでおった。大麦・小麦・稗・粟・大豆・蕎麦・油荏・麻・大豆・小豆・タバコ・菜・大根・特に野蒜・アサヅキは良質で評判であった。諸上納は後記に示してあるが、漆御役木は九〇四本二分で、漆汁は、九盃四勺二才（九升四勺二才）も差出している。

山は集落を中心に周り二十五里もあり、南北に長く東西に短い形の山である。この山の幸は、四季毎に咲くいろいろな花・山林に住む鳥獣などである。これらも生活の資とすることもあった。明治になっても、金山町三更の角田政雄家（現）から開拓に経験ある人が入婿するなど、村人は適地の開拓を続けて、食糧増産の叫ばれるころも、耕地は更に新しく開拓をすすめていた。

昭和三十五年ころの戸数は二十六戸、人口一八五人、水田一〇ヘクタール、畑三〇ヘクタール、山林一〇〇ヘクタールの農業基盤もあった。現在は人口一三〇人、水田一〇・八三ヘクタール、畑一五・五八ヘクタール、山林一五九・八三ヘクタールと地域の特殊性を知ることができる。

(三) 信仰

信仰心も篤く、鎮守（氏神）は天和元年（一六八一）には熊野一社、文化五年（一八〇八）には熊野二社、現在は三社がまつられ、熊野神社二社、白山神社一社である。

熊野神社は六戸で護持しており、他の熊野神社は八戸。そして白山神社は十戸で、それぞれの家による小集団の信仰である。



古杉の井(徳一清水)

三つの鎮守がここにあるのは、ここへ住みついた年代順にわかれたのか、信仰の独自の集団としてこうなったかはわからない。ただ三々五々の散村が集まったという推考はできる。

菩提寺は光泉寺で村中にある。大同二年(八〇七)のころ徳一によって開基された寺で、その当時は法相宗から真言宗にかえた。本尊は徳一清水(又は古杉ノ井)という有名な泉が一千百年の昔と変わらない霊泉が湧いている。大野の人々の、生命と心を養ってきた尊

い清水である。泉は湧き出て絶えなかったが、寺はその後に衰えて火災にかかり、寺の形さえ失ってしまった。

寛文(一六六一〜七二)のとき、良専という浄侶がここへ来て檀中と談じ、寺を再建した。このとき浄土宗となり、寿命山の山号をつけ、本尊には阿弥陀如来の三尊仏をまつたのである。

この寺も衰え、建物も再度火災で焼亡したので、昭和四十年代に新築し、仏教信仰の中心的地位が立派に具現されたことはまことによろこばしい限りである。

本尊は上品上生の阿弥陀如来。向って右が観世音、左が勢至の二菩薩の浄土宗定形の安置である。これ以前の仏像の古像も保管されているが、一本の立派な仏像であったことが推察される。

徳一清水の傍に樹齢七〇〇年という杉の大樹もあったが、先年の暴風で倒木した。寺はもと会津若松市融通寺末であったが、現在は会津坂下町光明寺末となっている。

この境内に地藏堂があり、子育て地藏尊と六地藏尊(一本彫)が祀られてある。子を抱いた地藏を取囲むように六地藏がまつられているが、常にはこの六地藏は各家々で遊ばせており、子供の災難を守って下さるが、祭日の宵祭には全部の地藏がお堂に還えらるという。地藏の本当の仏心と御利益がここでは実践されている珍しい民俗行事なのである。

そのほかに、山ノ神・雷神・八幡・稲荷の諸神が、集落を囲んで祀られている。元旦の宮詣には、暁闇からローソク一把を使い、お

よそ二時間の送拜をするという。

水清く気澄み、実に近代文化社会の公害の苦惱の知らない清潔な土地である。自然の風土に包まれ今後の農民の幸福のため、青年の努力が望まれる。

〔四〕『寛文五年万改帳』による大野

大野村 (西行程三十五里)

- 一、此村ハ山ノ頂上ニ在リ、南北一町二十間、東西五十間、南へ二町隔テ家十一軒アリ。居体東向ニテカタノセナリ。後ハ山前ハ畑。大野村ノ謂ハ柳津虚空蔵堂大同二年徳一法師之建立。其時此処ニテ材木ヲ採ル小屋場也。杣取共此小屋ヲ住所トナス。野開キシ所トテ大野村ト名付ル。
- 一、家十四軒、竈二十四、男六十二人、女五十人、馬六匹年々増減有リ。

- 一、田方九反二十四歩、内三反五畝土色白砂土、五反五畝二十四歩土色黒土、四反五畝二十一步下ノ上、二十八歩下ノ中、四畝五歩下ノ下、並シ下ノ中。
- 一、畠方十七町二反三畝二十七歩内六町一反土色黒ヌ土、十一町一反三畝二十七歩土色黒野土、四町二反二十七歩下ノ上、六町八反七畝二十三歩下ノ中、六町一反五畝七歩下ノ下、並シ下ノ中。
- 一、早稲少糯稻少、晚稻中、大麦・小麦・粟・稗・蕎麦・麻・油荳
大豆・小豆・タバコ・菜・大根・外ニ野蒜・アサツキ・款冬。

- 一、高百二十五石三斗五升二合内百二十四石五斗八升四合本田、七斗六升三合新田、此取五十二石九斗九升四合。免四ツ二分二厘七毛六抔年々増減アリ。

一、年貢金十七兩二分、銀三匁四分八厘年々増減アリ、内大豆四石

二斗五升、油荳二斗五升ニテ納、年々増減アリ。

一、小役 金一分銀一分九厘七毛 綿役

一、同金一分銀四匁五厘六毛 糠藁

一、同 錢三匁二百四十文 足前

一、同 金二分銀十二匁七分二厘 山役

一、九百四本二分 役漆木此漆九盃四匁二才納。

一、十八匁九百八十七匁 御役蠟

十二匁六百五十八匁 大買蠟

此代金一分銀十四匁三分七厘九毛 被下之ヲ。

七匁二百三十三匁 小買蠟

此代金三分銀九匁八分六厘四毛被下之ヲ、右之外蠟余リ次第

相場蠟ニ指上ル。

金子一兩ニ付上蠟七メ三百之直段ニ金子被下之ヲ、蠟ノ位仮々

三百目下リ漆ノ実多有之年ハ大概金子五兩程ノ積リ目取、年々

増減有リ。

一、此村ノ宮 薪ヲ伐、葛ノ葉ヲ取商売ス、

一、御役大工 一人

一、粟・柿・梨・李・梅・胡桃

一、神社

権現宮 村東五十間ニアリ、開基年号不知。方五尺ノワラ葺、社ノ地東西五間、南北六間杉、朴有り。

明神宮 村南三十間ニアリ、方四尺ノワラ葺開基不知、社ノ地東西八間、南北十間、榎、ハナノ木アリ。

権現社 村ノ西三十間ニアリ、方三尺ノワラ葺、開基ノ由来年号不明、社ノ地東西十間、南北十五間松一本有り。

壽命山光泉寺 浄土宗、村ノ北二十六間、隔山ノ麓ニ在リ、由来記別紙ニ有之、寺内東西十間、南北九間、上畠四反八畝二十九歩寄附之ヲ、柿、梨有り。

一、山 大野村之四方ニ在リ、周リ二十五里、南北へ長ク東西へ短シ。高サ十五丈所在ノ草木、禽獸ハ桔梗、百合草、独活、蕨、岩菅・萱・菘・松多、桜・栗・榎・楓・マンサク・山鳥鳩・郭公・鶯・雀・狐・狸・兎

一、沼 村ノ西二町三十間、山中ニ在リ、周リ八十間、深サ六尺、小鮒少アリ。

一、郡境 村ヨリ南二里三町隔大沢ト云山、水落切ニ大沼郡軽沢村ト山境、巽ノ方三里隔、高坂山ソ子割ニ逆瀬川村ノ山境東ノ方二里隔若林ト云山ノ子割切出戸田沢村ト山境ナリ。

(五) 『天和元年(一六八二)書上帳』の大野

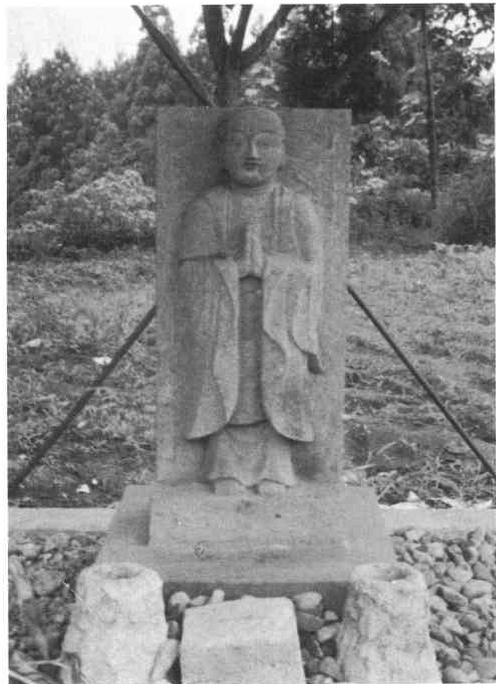
大野村 肝煎 新七、忰新内



↑地蔵和讃



→大野の子安観音像(一木彫成)



災難防除の地蔵尊(桧一木彫成)

高二四石八斗一升一合 木田・新田、免五ツ

田二十三石一斗七升二合 此反別一町九反二畝二十二步

畑六十八石一斗五升 此反別十三町三反一畝二十一歩

高二十三石四斗八升九合

人数一九〇人(内男一〇

二人、女八八)

家数三十二軒、但三十五

竈、馬十五疋

一、綿役 銀十一匁八分七

厘二毛

一、糠藁役 金二分、銀二

匁三分七毛

一、足前銀 二貫三七四文

一、山役 金二分、銀十二

匁七分二厘

一、漆木 九〇四本二分

一、漆目 九盃四勺二才

一、蠟目 三八貫八八一匁

御年貢蠟 十八貫九八

八匁

大買蠟 十二貫六五

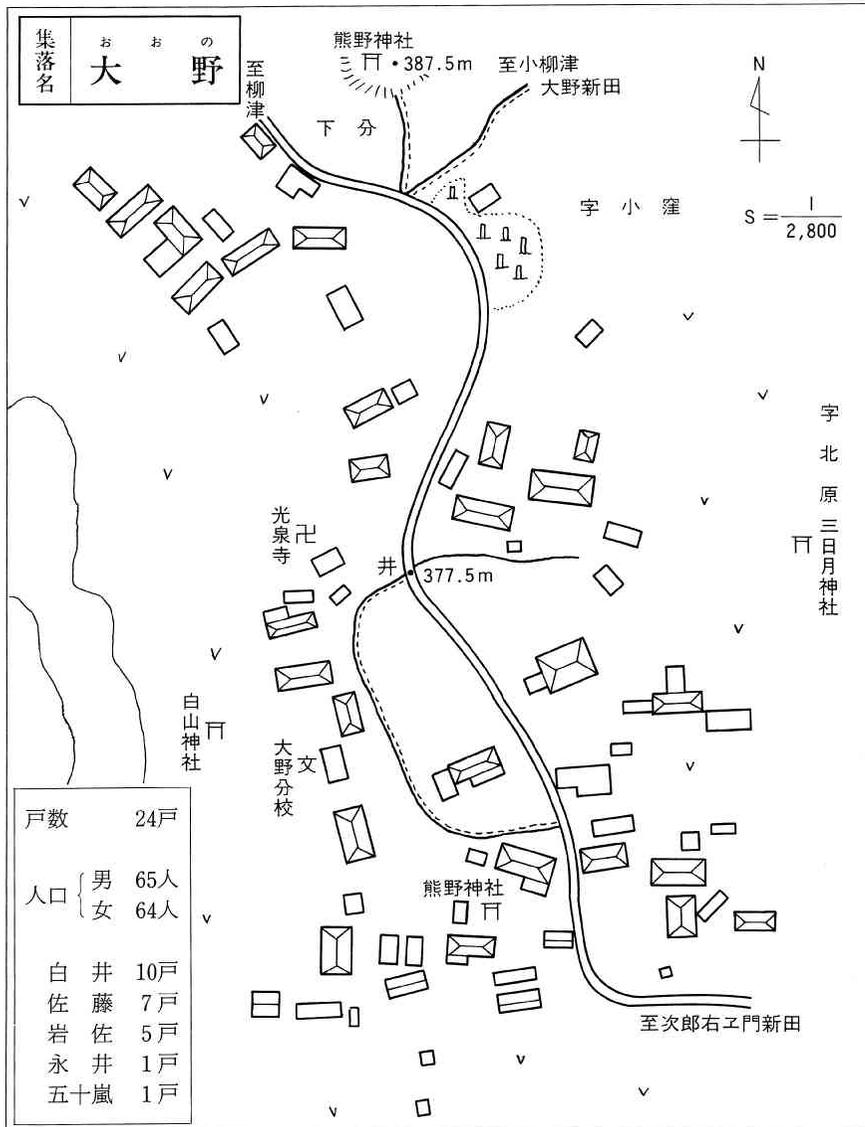
〇匁

小買蠟 七貫三三四匁

寺 浄土宗 光泉寺

神社 熊野神社

字北原 三日月神社



四、黒 滝

(一) 地名の起こりと村勢

黒滝という名の起こりは、寛文五年（一六六五）の書上帳に「由来不詳」とあって、当時すでに判明しなかった。しかし古老にきくと、「村北にある滝の岩が汚れたり、苔がむしたりして黒色に変化した岩肌が黒いために、黒滝というようになった」と伝えてきた。いまも現場は全くその通りの岩肌がみえる。

寛文五年の戸数六戸で竈八戸。人口三十一人であった。水田一町六歩、畑一町九反六畝十四歩で、平均耕作をみると小農経営であった。しかし山林に恵まれ、薪・葛葉・木ノ実を売り、楮も収入になっ
ているので、山の幸には恵まれている。

(二) 黒滝の災害

銀山川添いに居宅をたて、東西とも山が接近して日照時間も少く特に両方の河岸は水に弱い立地条件になっている。堅い急な岩肌に腐植土の堆積で、その上に繁茂した樹木なので、長い間に何回かの山崩災害と洪水に悩まされている。

災害の古い時代は不明であるが、明治十三年八月五日夜半、朝からの大雷雨が続いたため、寺山が崩れ押し出して芳賀勘吉家を潰し、勘吉は首だけを泥土から出していたのを救助された。幸に勘吉の妻子は戸外に出て難を免れた。

また、昭和三十一年七月十七日の未曾有の大降雨には（降水量二

八九ミリメートル）またも芳賀重治母屋裏の山が数十メートルの山崩れが押し出して家屋を埋め、重治の母イク、長男昭、三男英夫、四男和男が死亡した。英夫は九死に一生の姿で救助されたが、芳賀久吾宅に運ばれて間もなく絶命という悲惨事をおこした。このとき芳賀周一は愛妻を失っている。更に芳賀美佐雄、佐藤孫四郎の両家屋流失、芳賀茂四郎家宅半壊、その他は道路欠壊・橋梁特に田畑の流失は莫大な面積で、前古未曾有の被害であった。しかし郷土愛と農民の土に対する愛着の熱情、加うるに町当局の支援指導により、現在のようなすばらしい復興をみるようになった。

山峡の開田三・五ヘクタール、畑六ヘクタールは永い祖孫の開拓の結晶で、米・煙草・穀類と木材の産出が多い。

(三) 信仰

こうしたことから、山峡に住む人たちの心の支えは、山ノ神信仰であった。村の南西山麓に「山神社」（台帳登録）を祭り、壮嚴な御神像を奥深く祀まつりてある。御神像を今も現存するのはここだけで、実に貴重な信仰文化財で、これだけは紛失しないようにしなければならぬ。

また、この神社石階の鳥居近くに「鬼渡神社」の標柱がある。その後合祀されたのであろう。またその隣地に、延命地藏尊が祀られてある。

絵一本彫成で腐朽が甚しく、いつかの昔に堂もなく風雨に曝されたものと推考される。御丈六十八センチの地藏で、義軌にかなった



黒滝延命地藏尊(桧一木彫成)

姿勢である。元禄四年（一六九一）の像である。元禄十五年（一七〇二）には現在の堂を建立したのであろう。樺の内陣向拜柱とその欄間彫刻の様式と彩式などから推定される。そのとき鰐口奉納もあつたようである。陰刻で「奉掛地藏堂」と銘刻がみえる。この地区の人たちが、延命を祈った心が、黒滝の自然環境から考えることは十分納得できる。

菩提寺は戸数も少く護持することもできぬため建立したという記録は見あたらない。柳津の月光寺檀家で真言宗信徒である。

また滝があるため、不動尊信仰も盛んである。芳賀重治宅裏の滝不動、芳賀茂四郎宅前の滝の不動もある。

(四) 交通・温泉

交通も江戸時代は銀山の栄枯によって変化はしたであろうが、相

当な通行があつたものと思われる。この道路は生活道路として重要であるため、明治十七年に大改修。昭和十六年県道へ格上げ編入、そして昭和二十八年には、幅員拡張も終わって自動車による往来は至便になった。

また、ここから数百メートル上流に温泉湧出があつた。大正三年十二月、そこへ芳賀賢吉、二瓶初四郎、芳賀辰三郎の三人協力で温泉小舎を建て、「銀の湯」と称し多くの浴客を迎えて、およそ十年間経営した。経営主は二瓶登四郎で、この湯は、皮膚病に特効があつたという。

(五) 『寛文五年万改帳』による黒滝

黒滝村（西行程四十三里）

此村南北三十間、東西十五間、家居谷間ニテ向キ一纏ニアリ。後八山、前ハ川ニテ屋敷片下リ、東ニ柳津ヨリ御銀山へ海道アリ。黒滝村ノ謂不詳。

- 一、家六軒、竈八、男十六人、女十五人、馬二匹、年々増減アリ。
- 一、田方一町六歩、内一反五畝土色白砂交ノ直土。
- 一、一反九畝土色砂交ノ赤子バ土、二反一畝三步白子バ土、二反一畝下ノ上、一反九畝下ノ中、五畝三步下ノ下、並シ下ノ中。
- 一、畠方一町九反六畝十四歩内一町六反一畝十四歩土色石交ノ赤砂土、三反五畝砂交ノ赤真土、五畝十四歩下ノ上、五反九畝下ノ中、九反二畝下ノ下、並シ下ノ中。

一、晚稻中糯稻少、大麦・小麦・大豆・小豆・粟・大角豆・稗・芋
 油荏・胡麻・蕎麥・黍・菜・大根、外野蒜・アサツキ・スキナ
 一、高十六石二斗八升五合内十五石九斗七升二合本田、三斗一升三
 合新田此取六石一斗六升免三ツ七分八厘二毛六払一味年々増減
 在リ。

一、年貢 金二兩、銀二匁六分 年々増減有リ。内大豆五斗、油荏
 三升ニテ納、年々増減有リ。

小役銀二匁七厘六毛

綿役

同 銀二匁六分六毛

糠藁

同 錢四百十五文

足前

同 銀十二匁八分八厘

山役

同 錢百五十文

松葉サライ

同 二百十九本六分 役漆木此漆二盃一合九勺六才納ル処、漆

木不足半分程毎年金子ヲ以納ル。

四メ六百十匁

御役蠟

三メ七十五匁 大買蠟此代銀七匁三分八厘被下之、一ノ七

百五十七匁小買蠟此代銀十四匁八分五毛六払被下之ヲ漆木

不足、殊ニ每春実霜ニ逢年々御未進有リ。

一、楮 金一分程ニ売ル、年々増減在リ。

一、此村之宮薪ヲ伐リ葛葉ヲ取商売ス。

一、李・胡桃・杉・槻

一、寺社

地藏堂旧跡 村ヨリ十間山中ニ在リ、開基不明、二十年以前ニ

破損ス、堂地方三間破損以後、村ノ中へ移シ方二尺ノ小屋ニ

立置ク。

山神宮旧跡 村ノ巽ハ四十間ニ有リ、開基ノ由来不知。社ナシ

何レノ比ヨリ意顛スト云コト不明、社ノ地、方三間、五葉松

梢有リ。

権現宮 村ヨリ亥ノ方十二間ニ有リ、開基不知方三尺ノワラ葺

社ノ地方四間栗梢アリ。

一、山 村ノ西、悪津柳津兩村之山境峯割ニテ東向キ片平山、南北

二里半麓ヨリ頂マテ三十五文、河向東ニ鷹鳥山ト云フ、小柳

津山境片平山、南北へ二里半、高五十丈在ル所ノ草木禽獸ハ

松多シ、栗・梢・桜・山ウツギ・躑躅・楓・菖・薯蕷・萱・

独活・蕨・蒔・桔梗・女郎花・蓬・山鳥・鳩・雀・シトト・

雁・狐・狸・兎。

一、川 濁川 村之東十五間ヲ流ル、水上ハ軽沢銀山ニテ金洗水常

ニ濁北へ流テ柳津、揚ノ川へ落合フ。濁水故ニ魚ナシ。

(六) 『天和元年(一六八〇)書上帳』にみる黒滝

黒滝村 肝煎 儀八・悴茂助

高六十三石二斗四升九合 本田・新田・免三ツ六分

田十四石五斗五升五合 此反別一町二反七畝六歩

畑十九石四斗六升九合 此反別四町八反一畝二十一步

高二十九石二斗二升七合

新田

人数七十四人(男三十七人

女三十七人)

家数十三軒、但十三竈、

馬六疋

一、綿役 銀四匁四分二厘

三毛

一、糠藁役 銀十匁一厘二毛

一、足前役 八八〇文

一、山役 銀十二匁八分八厘

厘

一、漆木役 二一九本六分

一、漆目 式盃一合九勺六

才

一、蠟目 九盃二四三匁

内御年貢蠟 四貫六一

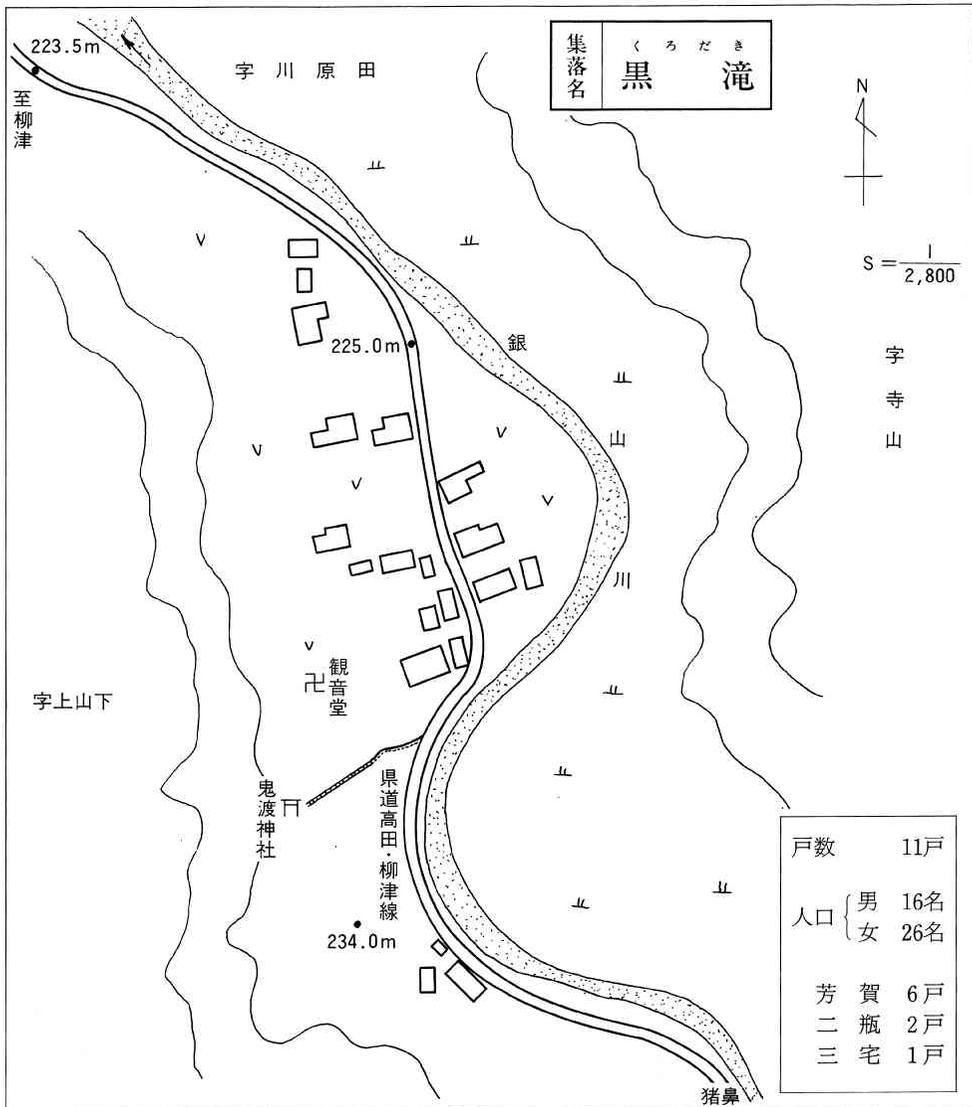
一匁

大買蠟 三貫七十

五匁

小買蠟 一貫七五

七匁





山に囲まれた猪鼻の集落

五、猪 鼻

(一) 地名の由縁

銀山川の川すじに沿って黒滝の集落をすぎると、黒滝と猪鼻の境界のところに橋がかかっている。ごく最近までに、この橋のそばの道路ぞいに道におしかぶさるような大きな岩があって、土地の人々は「シシガハナ」とか「シシガイワ」と呼んでいたものである。こ

の「シシガハナ(シシガイワ)」と呼ばれる岩のあるところから「猪鼻」との地名が生まれたといわれるが、シシとは猪のシシをさしているのである。猪鼻の地名に関する記録には、

「猪鼻村ト云謂ハ村ノ良ノ方ニ高サニ丈余リノ岩アリ此岩猪ノ鼻ノゴトクナル。仍テ猪鼻

村ト名付ル」(『牛沢組万改帳名』)。

「○猪鼻村 村北黒滝村にゆく路の傍に猪の鼻に似たる岩ある故に村名となせしとぞ今は岩崩れて其の形とも見えず」(『新編会津風土記』)

などがあり、村名の由来が判然としている。

藩政時代末期にはすでにその猪の鼻の形も崩れてしまったこの大きな岩は、それでも戦前の銀山街道の狭隘な道路のそばにそそりたっていて、特に積雪期には道を踏み固めるのに障害となり、人々の往来に不便をきたしていたものである。ごく最近になってこの辺も道路改修によって、人々の難儀をかったこの名物岩「シシガハナ(シシガイワ)」も削りとられてしまい、もはやその形は偲びようもない。

(二) 村の起こり

猪鼻村がいつのころに起こったのかは判然としていない。しかし比較的古い家系は佐々木二郎氏と角田孫市氏の家系と考えられる歴史素材はみられる。

佐々木家については『新編会津風土記』に、

「○古蹟 ○館趾 村東四町三十間山上にあり、東北十五間南北十間此村の農民左衛門と云もの、先祖(其名も時代もしらす)住すと云、平左衛門は近江源氏にて佐々木の餘裔とて系図のごとき一卷を持傳ふ、文字語路共に分明ならず」とある。

一方、角田家については同書に、

「○家 ○角田鉄右衛門 此村の肝煎なり、先祖は越中守國次とて天喜の頃、源義家朝臣に随ひ此地に來り六世の孫越前守國元何の頃にか始て葦名氏に仕へ、代々此村に住し、天正中葦名家滅て浪人し、農民となりしと云、今の鉄右衛門まで幾世と云ことを傳へず、先祖の遺物とて弓一張を蔵む」

と記載されていて、角田越中守國久という人物が天喜年間（一〇五三〜一〇五八）この地（猪鼻をさすものか）に來住したことになる。現在の角田孫市氏宅の屋敷内には周囲約二丈余の古櫓（現在は道路改修のため伐採）とともに、明治四十四年に建碑された「寿松院碑」があって、この寿松院碑の刻文をみると風土記と多少のちがいはあっても、大筋では共通していることがわかる（本誌下巻柳津記念碑総基参照）。

「寿松院碑」は漢文体で刻され、星野胤国氏の選文、目黒重介氏の書によって角田国秀氏が建てたものであるが、その内容は大要次のようになる。

「寿松院は角田国家の法名である。其の系は大織冠鎌足公に出でて、その後裔越中守国は近江（現滋賀県）にて始めて角田氏を称した。天喜五年（一〇五七）源義家に従って陸奥国の安部兄弟を征した。国次後の三世築前守正家は故あって越前にいき新田義貞に属して黒丸城攻略のさいに戦死した。国次の子国元は会津に來て会津領主葦名氏に仕えるようになったが、七世後の国家のときに葦名氏

は伊達氏と戦って敗れたために、国家はのがれて天正十九年十月二十日に天外和尚を訪れ、野沢村常葉寺において数か月弟子となっていた。国家は常に鋳業をもって国利になりそうとして各地をめぐり軽井沢銀山を発見してこれを採掘したが信仏の心によってか遂にこれを探ることができた。国家は猪鼻村に一草庵を天外和尚に請うて寺とした。蓮寿山西光寺である。そのために西光寺は天外和尚を以て開山の祖とし国家を開基とした。後に国家は村民に請われて猪鼻村の里正（肝煎）となり一家を構えた。国家は自らの意志で墓地に地中に埋まって二十一日間地中において鐘をならしていたが、ついに慶長十三年六月三日に及んでその鐘声も絶えた。国家の法溢を寿松院弦随正覚庵主というが其後十三世国直まで代々猪鼻の里正を勤めていたが、国直の代に至って家事執筆のために里正の職を辞した

—— 以下略 ——



寿松院墓碑

柳津町誌編纂の先駆者であられた故佐々木鼎氏は、この寿松院碑と寿松院墓について次のように述べておられる。

「右寿松院碑は現角田孫市氏の庭前、古き樺樹の許に建つ。この樺樹は周囲約二丈程を囲る古きものである。幹の中程は空洞となり、一見して往昔を偲ぶに足るもので、稀にみる古木である。

また寿松院の古墳は家下田原にありて、碑石傾き半ば土中に埋もれたれば、後世その前にそれと同じき碑石を建て、角田家に於て今に懇ろに弔うている。

その碑石の周囲に古き杉の切株数個あるが、その後新たに杉樹五、六株を植栽して、その古墳を保存している。

この寿松院（角田国家）の墓石をみると、正面には、

「角田祖 當寺開基壽松院弦隨正覚庵主」

側面に「慶長十三年」「亡六月三日」と刻まれている。

(三) 西光寺の開基

このように西光寺は「寿松院碑」によると、天正十九年（一五九〇）から慶長十三年（一六〇八）の間に角田国家によって開基されたとしているが、これには別説がある。

たとえば、寛文五年（一六六五）に西光寺住職良順が記した『西光寺藏堂略記』には、

「陸奥州會津稻河領猪鼻村蓮壽山西光寺者（方會陽城之西去程四十五里余）明應元年壬子夏六月十日、胡南比丘東桂和尚從越前州

行脚來開基當庵 號山蓮壽名寺西光。……」

とあって東桂和尚が天正以前の明應元年（一四九二）に開基したところとなっている。角田国家が開基したころより百年もさかのぼることとなる。なお、同書によると如意輪觀世音を安置したこの寺も東桂九世に及んで、

「殆断児孫闕數年及頤頽矣。爾來寛水十一甲戌秋八月上旬、孝壽和尚再興當庵」

するに及んでいる。

また、『新編會津風土記』には、

「○寺院 ○西光寺（境内十二間四方年貢地）村中にあり、蓮壽山と號す、野澤原町常樂寺の末山曹洞宗なり、明應元年東桂と云僧越後國より來て開基す、後住僧なく殿宇頽破せしを寛永十一年孝壽と云比丘檀越を勤めて再興せしと云、此寺の開基角田越前と云ものゝ位牌なりとて壽松院弦隨正覚庵主慶長十三年六月三日と書付あり（越前を此寺の開基と云こと縁起には見えざれども併註して考證とす）本尊如意輪觀音客殿に安ず、△地藏堂 境内にあり、地藏長六寸計古佛なり」

と、東桂、越前（国久）が開基したという二説を併記している。なお詳細は本誌下巻記念碑総基を参考にしてほしい。

(四) 藩政時代の村況

藩政時代の猪鼻の村況は、

「此村東西四十間南北エ三町二十間、但シ南エ一町二十間中絶シ

テ家八軒アリ。居躰東向キ後へ山前ニ小川在リ。東八田、西南ニ
 畠アリ、村ノ中ニ御銀山エノ海道アリ。……家十一軒、竈十一、
 男三十四人、女三十七人、馬四疋年々増減アリ。田方三町疋反十
 一步……畠方五町七反八畝十歩、高七十一石疋斗五升本田、此取
 式拾四斗四升式合、免二ツ八粉七厘三毛六味、年々増減アリ、年
 貢一金、六両三分銀疋匁三粉六厘、年々増減アリ。内大豆二石四
 斗油荏一斗三升ニテ納ル、小役銀九匁式粉五厘綿役、同銀十疋匁
 三粉八厘四毛糠藁、錢疋貫八百五拾文足前、同金疋分銀六匁五粉
 六厘山役、同錢式百七拾文松葉サライ 八百拾二本役漆木此漆八
 盃疋合ニタ、拾七貫六十三匁御役蝸 此村之宮新ヲ伐リ商売ス」
 (『寛文五年牛沢組郷方改帳』)

といったものであった。また、『牛沢組村高目録』によれば次のよ
 うな時期もみられた。

猪鼻村 肝煎孫左衛門 悴鉄右衛門
 高百九石六斗三升三合 本田新田
 免 三ツ疋分
 田 三拾八石四升九合 此反畝三町疋反式拾八歩
 畑 四拾石六斗五升六合 此反畝八町疋反式拾三歩
 高 三拾石九斗式升八合 新田
 人数 百拾三人 内五拾三人男 六拾人女

家数 式拾六軒 但式拾七竈 馬五疋

- 一、綿役 銀拾匁式分三厘式毛
- 一、足前錢 式百四拾六匁
- 一、山役 金疋分 銀六匁五分六厘
- 一、漆木 八百拾式本式分
- 一、漆目 八盃疋合式タ式才
- 一、蝸目 三拾四貫六百式拾五匁

拾七貫五合六匁 御年貢
 内 拾疋貫三百七拾疋匁 大買蝸
 六貫四百九拾八匁 小買蝸

さらに風土記には、

「府城の西に当り行程七里十八町、家数十八軒、東西四十間南北
 三町二十間、山間に散居す 四方に田圃あり」と記載されている。

猪鼻でもこのように長い藩政時代には戸数ひとつを例にしても増
 減がみられた。ここに佐々木家所蔵の古文書の中にある『相定申連
 判書物之事』というひとつの文書がある。これは享保十年(一七二
 五)二月一日に猪鼻村の百姓一同が、滝ノ入新田開発に伴う山入会
 (入相)権や新百姓又四郎の取扱いなどを二か条にわたって取り決
 めをしそれに誓約捺印したものである。この猪鼻村の村定に捺印し
 た人数は、地首孫三郎のほか新百姓又四郎を含めて二十六名に及ん

でいるが、肝煎孫兵衛宛にしたこの誓約書からも、享保年間（一七一六～一七三五）には既に猪鼻村は戸数二十六戸にも及んだ村勢の隆盛期があったことがしのばれる。戸数十一戸、二十六戸、十八戸という変遷ぶりは、長い藩政時代における猪鼻村の村勢の隆盛と衰退とを如実に示すものにはかならない。

(五) 角田家文書にみる猪鼻

猪鼻の角田家については前述したが、現在の角田孫市氏宅に保存されている近世古文書をとおして、当時の村のすがたをうかがってみよう。

猪鼻の集落は、里道川に沿った僅かな水田のほかには、畑地と山とが生活の支えとなっていて、とりわけ山は重要な経済基盤となっていた。そのために山境や林産物、入会権などをめぐって種々の問題が起っている。

まず、猪鼻での蠟、漆の問題を取りあげてみよう。猪鼻には八百十二本五分の役漆木があり、漆八盃苅合ニ夕五才の納人が課せられていたが、

「漆木不足故毎年未進ニ積リ有之、拾七貫六十三匁、御役蠟漆木不足ニ仍テ大分之未進積ル故、十四年以前辰之年ヨリ大買蠟、小買蠟御赦免アル。然レトモ近年毎春之霜ニ逢イ、或ハ五貫目ツ、納ル故ニ年々御未進アル」(『寛文五年万改帳』(傍点筆者))。

という状態もあった。このように漆木数の不足や霜害などのために年々未進(税の未納)が積ったわけで、猪鼻ではこの漆と蠟の未進

にはかなり苦慮したらしく、次のような訴状を享保十年(一七二五)に提出している(読み下し文とする)。

恐れながら願書を以て御訴訟

河沼郡猪鼻村は高百八石四斗五升、漆木八百拾式本五分の御役を百姓拾式人にて相務め申し候処、古来の有木不足ニ御座候。尤も漆木かけ申すに付き蠟漆共ニ数年御未進相重り迷惑仕り候。之に依て子年より去る辰年迄漆木ハ休木ニ成し下され、蠟の義ハ大買蠟、小買蠟共ニ御用捨遊ばされ有り難く存じ奉り候。然れハ当年より御定役相勤め申す筈ニ御座候。夫れに就て御訴訟申上ル義ハ、植木苗木もいま、だ成長仕らず古来の有木も過半□枯れニ罷り成り木実生り申さず候ニ付き、年々御未進蠟相積り代金を以て上納仕仕り至極迷惑に存じ奉り候。幾重通りの御訴訟恐れ多く存じ候得共、逆々御慈悲を以て当巳年より酉年迄五ケ年中、大買蠟小買蠟漆役共ニ御用捨成し下し置かれ候はは、植木苗木も段々成長仕り御赦免の年季明け候節ハ御定役相勤め永く百姓相続き有難く存じ奉るべく候。尤も不足蠟代金負数は付紙ニ記し差し上げ申し候。

以上

猪鼻村惣百姓代

庄左エ門

同

彦右エ門

彦右エ門

地主

六右エ門

肝煎

孫左エ門

大竹作右衛門様

高畑嘉太夫様

この願書にもあるように、藩から課せられている漆と蠟とを現物として納入することはなかなかむずかしく、猪鼻の場合は何度も現物納入の赦免方を願っているわけだが、しかし、

「尤不足蠟代金負数ハ付紙ニ記差上申候」

とあるように、不足分は現金に代えて納入しなければならなかったのである。

次に、隣村大野との山境、入会権などについての取り決めもみられる。宝永八年（一七一二）の文書には、

「此度猪鼻村領分松坂、先年より山年貢百文宛出定入作ニ有之候処……」

山境が不明なために種々問題も派生したので定入作している大野と松坂を領分としている猪鼻との両方の立ち会いの上に、入会区域の取り決めがなされ念書をかかわしている。

享保初年ごろ（一七一六～一七二四）には、滝之入に新田が開発

されたらしく、この滝之入新田区域の入作をめぐる村定め書連判については前に述べたとおりである。なお、この『相定申連判書物之事』には、

「一此度滝之入新田開発被成候ニ付、金拾三両式分受取、田畑其村中ニ而開発一切手入不仕候筈ニ連判証文差出申候。田畑共開発仕間敷候ニ、田□□東西平は縁切、南ハ輕井沢境、北ハ滝迄相渡申候 其外山沢草木迄障リニ被成候事不仕候、若盗取ニ入込候者見付候ハバ過料金式分宛差出申筈、若見付候者見のかし候ハバ同断ニ過料取旨相定申候事」

として、滝之入新田に入って山作業をすることは禁止されたわけである。これを破った者は罪金として金二分を徴収されたのだから入会禁止も相当にきびしかったといえる。

また、猪鼻の山々には猪がでたこともあるのか、猪を威嚇する鉄砲（俗におどし鉄砲という）を拝借した際の覚書もみられる。

覚

一、御貸鉄砲 志挺

右は猪獅子出候て作物喰荒し候ニ付

御貸被下置難有奉存候 尤玉なしニ而

威一通りニ仕決而他江貸渡等仕間敷

依而借用證文指上申候 以上

猪鼻村肝煎

角田孫左エ門

宝永三年戊九月

会津郡

郷御役所

この猪獅子は会津に多い熊のこととも考えられる。熊を単にシンということがあるからである。

(六) 明治からの猪鼻

明治に入ると、猪鼻にもいろいろな変化が起こった。明治八年（一八七五）には、猪鼻・塩野・黒滝・長倉の四か村が合併して猪倉野村が誕生した。また、藩政時代に御銀山街道といわれた猪鼻から塩野・軽井沢に達する狭隘な道路も、明治十一年（一八七八）からの軽井沢銀山の再掘にもなっただいに改修されていた。特に十九年（一八八六）に至ると、

「同年四月始り軽井沢銀山盛山ニ付、柳津村ヨリ黒滝猪鼻ヲ経テ銀山ニ至リ（ル）、通行荷車人力車差支無ク六月迄道路開墾ス」

『六十余年実記』

とあるように、荷車、人力車も通れる銀山への街道は、藩政時代に比較すると著しく改修されて人々の利便を得たことがわかる。

このとき、猪鼻から塩野に行く途中の銀山川に大きな橋が架けられ、人々の目をおどろかせたそうである。銀山への輸送物を通すにはがっちりとした橋が必要だったからで、これが百枚田の大橋であ

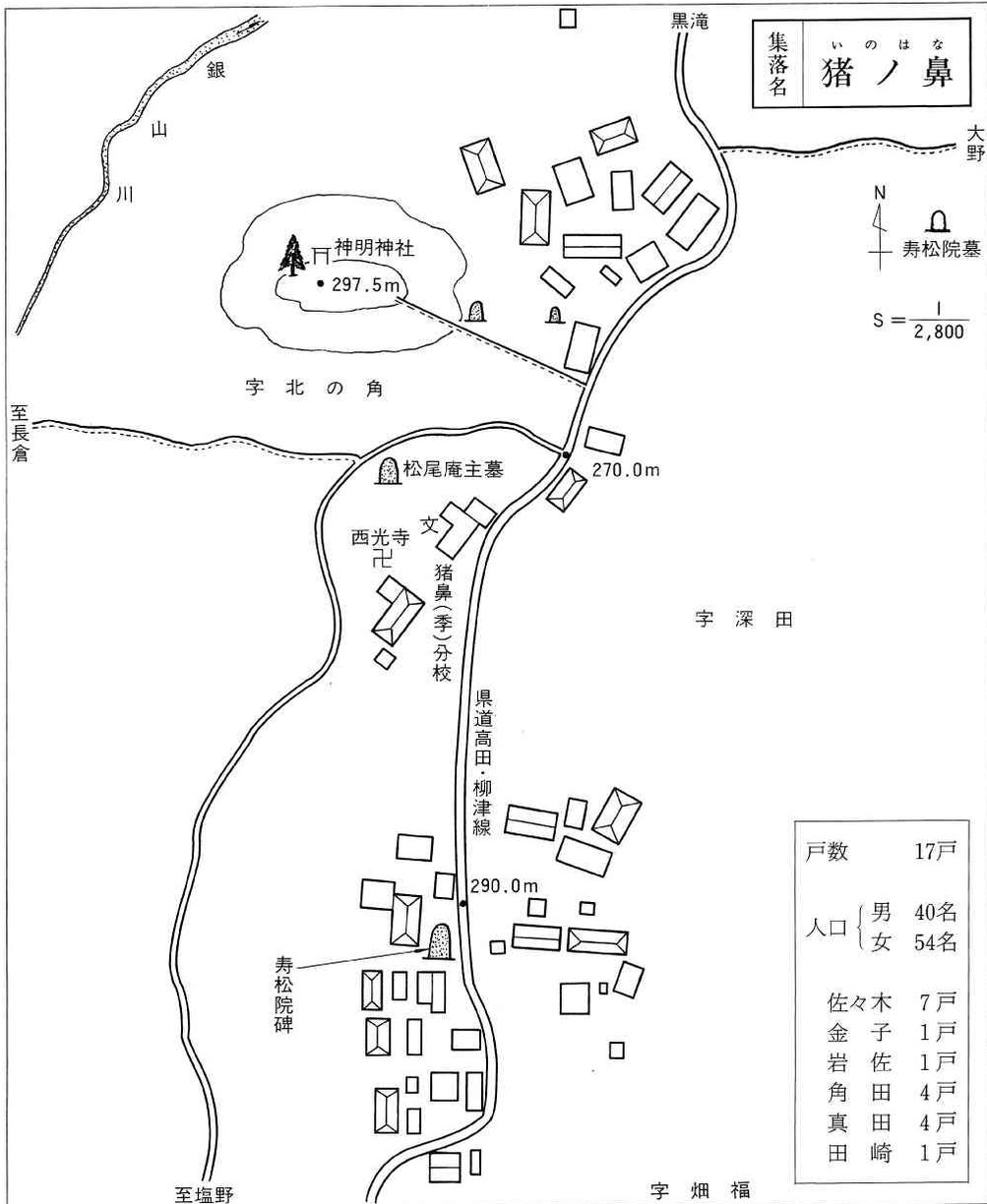
り、土地の人々は、「大橋、大橋」と呼んだそうである。この百枚田の大橋を渡ると道は急坂となり、やがては平坦地となって塩野に着く。百枚田の俗称にはこの土地を耕した昔時の人々の情熱と悲哀とユーモラスとがかくされている。むかしこの土地のお百姓さんが田圃を数えて九十九枚目まですんだが、どうしても百枚目の田圃が見つからない。おかしい、たしかに百枚あるはずなのにとよくよくみたら、百枚目の小さな田圃は自分のむしろの下にかくされていたという伝説である。銀山川沿いの小さな一枚一枚の田圃を相手に、日なが一日こつこつと耕している農民のすがたが、ありありと目に浮かぶようなそんな地名であり地形である。

猪倉野村は、明治二十二年（一八八九）には隣村郷戸村と合併して倉戸村となり、その後、大正十年（一九二二）にはこの倉戸村と柳津村・飯谷村との三村が合体合併して柳津村となったが、その都度猪鼻は軌を共にして今日に至っている。

明治三十八年（一九〇五）の凶作には、山間にあった猪鼻は大損害を受けたが、同年以降の国有林解放、民有林への払い下げなどによって、薪炭製造・植林・森林伐採など山による活路も開けるとともに、草野開発による人蔘栽培・桑樹植付による養蚕経営などを積極的に取り入れてきた。また、大正二年（一九一三）、昭和三十一年（一九五六）、同三十四年（一九五九）の大水害には、銀山川・里道川沿いの水田が押し流されるという苦難も相続している。中には田地の完全流失、あるいは瓦礫の水田となり耕作不能となった水田も

少なくはない。

しかし、こうした度重なる災害を乗り越えて、猪鼻は堤の築造（大正十一年）道路の改修（昭和十一年・昭和四十八年）、県道への昇格（昭和十六年）、中田地区の水田整備（昭和四十八年）など着々と生活の基盤整備を進めてきた。そしてその歩みは地道であっても限りなく続くのである。歴史はくりかえすという。現在、百枚田の大橋のあったところには、再び橋が架けられることになった。そして大橋付近の畑地は銀山川から電気揚水による水田と変じている。百枚田橋の架橋は単なる歴史のくりかえしではなく、これら地域住民の幸せへのかけ橋なのである。



六、塩野

(一) 地名・地勢

塩野の地名については確証はないが、この地区の北東部山麓とそれに続く耕地に、塩分を含んだ岩塩があり、その塩分のため作物が成育しなかったため、これが強く印象になって塩野という名称になったようである。



塩野部落遠望

天文二年（一五

三三）に創建され

た高林寺の山号も

塩水山と命名して

あるのも、当時

はまだ塩の被害を

蒙^{かぶ}っていたため、

その災害から逃れ

たいという庶民の

願望も添えられて

いると考えられる。

寛文五年（一六六

五）の書上帳をみ

ると、この山峽に

「戸数十九軒、竈

二十七。人口百人（男五十五、女四十五）で、馬六疋、牛二匹」と

ある。耕地もそのころ「水田四町七反三畝二十歩、畑二十五町七反八歩」とある。三百年前にはすでに相当農耕が進んでいた。特に銀

山採鉱の盛んな寛永（一六三〇）の頃は、全戸に銀山関係の人達の同居などもあり、鉱山の盛衰と塩野は生活を共にしたと思われる。

文化五年（一八〇八）の書上帳には、十六軒となっている。地勢的にみて、水田が狭いので、畑作と山林の利用に力を入れた。木炭製造・山菜・桐・山林植樹に真剣である。

永いあいだ店舗もなく、生活物資の移入、生産物の移出は、馬と人の背を使う以外なかった。特に軽井沢・赤留峠・高田・若松へ往来するか、または長倉、あるいは猪鼻を通過する以外なかった。自給自足の農家は半数位であったので、種々の面で容易な苦労ではなかったろう。

銀山採掘が閉山または廃山になると、土地の所有者以外は、今の会津坂下町に移住して生活の道をたてたといわれている。戦時中また疎開者が入り十六竈になったこともあるが、現在は銀山街道上に三戸、同道下の傾斜地を整地して七戸となっている。昭和になり農協経営の有線放送施設が完成して非常に便利になり、その後また昭和三十五年頃公衆電話架設し、同四十六年一月十一日には、待望の農集電話開通により距離的・時間的にも近代化していった。昭和十八年十一月八日には、長いランプ生活から、文化の光りがともるようになった。

(二) 塩野の神仏

菩提寺高林寺は、元和のころ（一六一六―一三）火災ですべてを失って慶安元年（一六四八）再建したがのち腐朽した。今は寺屋敷に石仏の聖観音合掌像を祀^{まつ}ってその遺跡を留めている。

最近ここへ地区の集会所を建てた。鎮守は寺地の北東一町三十間に木造権現造の春日神社が祀られている。古鎮守址もその隣にあるが、神社を中心に寄宮したそれが、元禄四年（一六九一）十月でこの棟札が納められている。

春日神社は寛文の記録をみると、その廃頽が甚しかった。御神像も祀られていたが現在には失っている。

塩野には伯楽がいた。伯楽とは獣医であって、家畜、特に馬の健康をあずかる人で、この田村家の先祖元右エ門は、いつのころか秦の国から帰化した人に獣医学のすべてを習得し、広く地方に貢献した人である。馬頭観音を深く信仰し居宅にこの像を祀って家族全員が信仰していた。

また近郷の人々も信心が深く、旧四月八日の祭日には、牛・馬に飾り鈴などをつけて参詣し、時に五〜六十頭の列が続いたと語り伝えている。

この日田村家では一俵の餅をつき、参詣の牛馬に御護符として与えたという心あたまる伝承がのこっている。

塩野は灌漑用溜池は作っていない。高森山からと、銀山川の水を灌漑に利用してきている。

(三) 災害

災害では伝承であるが、村南に大石三個がある。これは大同年間大地震爆発などのとき、大谷地から流れ来たと、大同災害の悲惨さと激甚さを伝えるよすがでもある。また塩野の北端れの学童遭難は軽井沢の項に掲載した。塩野の現有耕作地は、水田三・九三ヘクタール、畑三・五九ヘクタール、山林六九〇ヘクタールである。この耕地山林を今後の生産上にどう改良し実施するかは、青壮年の人々の計画と実行力によると思う。



古昔に塩が流出し稲作を不作たりし地（現在は改良を加え肥培管理もよく良田化しつつある）



学童供養塔の碑文



学童供養地藏尊

(四) 『寛文五年万改帳』にみる塩野

塩野 村(若松ヨリ西、行程三十五里)

一、此村東西四十間、南北二町五十間、北へ四十間、中絶シテ家四軒在リ、居体東向ニテ片下リ、東北ハ田、西南ニ畑在リ、村ノ中御銀山へ之海道アリ。塩野村ノ謂不分明。

一、家十九軒、竈二十七、男五十五人、女四十五人、馬六疋、牛二匹年々増減有リ。

一、田方四町九畝六歩、内五反一畝土色黒真土、二反二畝土色砂交ノ黒野土、九反一畝十八歩土色黒野土、四反土色黒、八反七畝下ノ中、一町一反七畝十八歩下ノ下、並シ下ノ下。

一、畑方二十五町七反八歩内四町四反土色白真土、十二町土色砂交リノ黒野土、四町八反土色黒野土、四町五反八歩土色黒ス土、黒内十二町一反下ノ中、十三町六反八歩下ノ下。並シ下ノ下。

一、晩稻中大麦・小麦・大豆・粟・稗・蕎麦・小豆・大角豆・油荳芋・麻菜・大根 外アサヅキ・スキナ・蓬・款冬・ヂシバリ。

一、高百五十九石一斗三升三合内百五十八石五斗本田。六斗三升三合新田、此取六十四石八斗八升五合、免四ツ七厘七毛四払一味年々増減在リ。

一、年貢金二十一兩一分、銀十五文五粉六厘、年々増減アリ。内大豆五石二斗、油荳三斗一升、年々増減アリ。

一、役 一金一分四匁六粉八厘七毛 綿役

一、金一分銀九匁四粉六厘一毛 糠菓

一、錢四メ百二十一文 足前

一、金一分銀三匁二粉八厘 山役

一、錢二百文 松葉サライ

一、千七百九十七本五分、役漆木此漆十七盃九合七勺五才納廻漆木不足故有漆指上ケ不足ノ分年々御未進ニナル。

一、三十七メ七百四十八匁 御役蠟。二十五メ百六十五匁。大買蠟

此代金三分、銀十二匁三分九厘被下之ヲ。十四メ三百八十目。小買蠟此代金一兩三分銀三匁四厘被下之。

漆ノ実多有之年ハ御役納餘リ蠟少有之トイトモ年々増減有ニ仍テ段々未進ニ指引アル。

一、此村之宮薪ヲ伐藁ノ葉ヲ取商売ス。

栗・柿・胡桃・李・榎

一、神社 春日神社

村ノ東一町四十間ニアリ。開基不知、方三尺ノ萱葺、長七寸ノ座像。社ノ地東西五間南北六間杉ハナノ木アリ。

一、寺 塩水山高林寺、曹洞宗

村ノ中民屋ニ列。来由記別級ニ有之。寺内東西十五間南北十二間、下田二畝、下畑一反寄附之。水ノ木一本アリ。

一、山 塩野村山ハ村ヨリ西ニアリ、大峯、軽沢山境ソ子割ニ北向キニテ平山、東西へ四里、麓ヨリ頂マテ七十三丈頂上ヲ高森山ト云。此山所在ノ草木禽獸ハ独活・桔梗・女郎花・葛野老

蕨・薯蕷・イチゴ・山蕪・萱・菝・松多・栗・檜・桜・山漆

岩ツツジ・朴・楓・マンサク・山ツゲ・ユヅリハ・山鳥・

鳩・シトト・山雀・鷹・狐・狸・兔、右ノ山中ヲ金山谷ヨリ若松へノ海道アリ。

一、川 濁川ハ村ヨリ四十間東ニ在リ。水上ハ軽沢遅沢山ト云所ヨリ出、軽沢ノ西ヲ過キ村ノ東猪鼻村へト下流ス。濁水故魚ナシ。

一、郡境 村ヨリ南二町隔テ樋ノ口ト云所、大沼郡軽沢村ト境、西

ノ方三里二町隔タズマイト云所、御蔵入大峯村ト境ナリ。

(五) 『天和元年(一六八一)書上帳』にみる塩野

塩野村

高一五五石二斗〇升〇合(本田・新田)

田三十七石一升一合 此反別 四町七反三畝二十三歩

畑八十九石九斗九升四合 此反別 二十三町二反三畝二歩

高二十七石八斗六升一合 (新田)

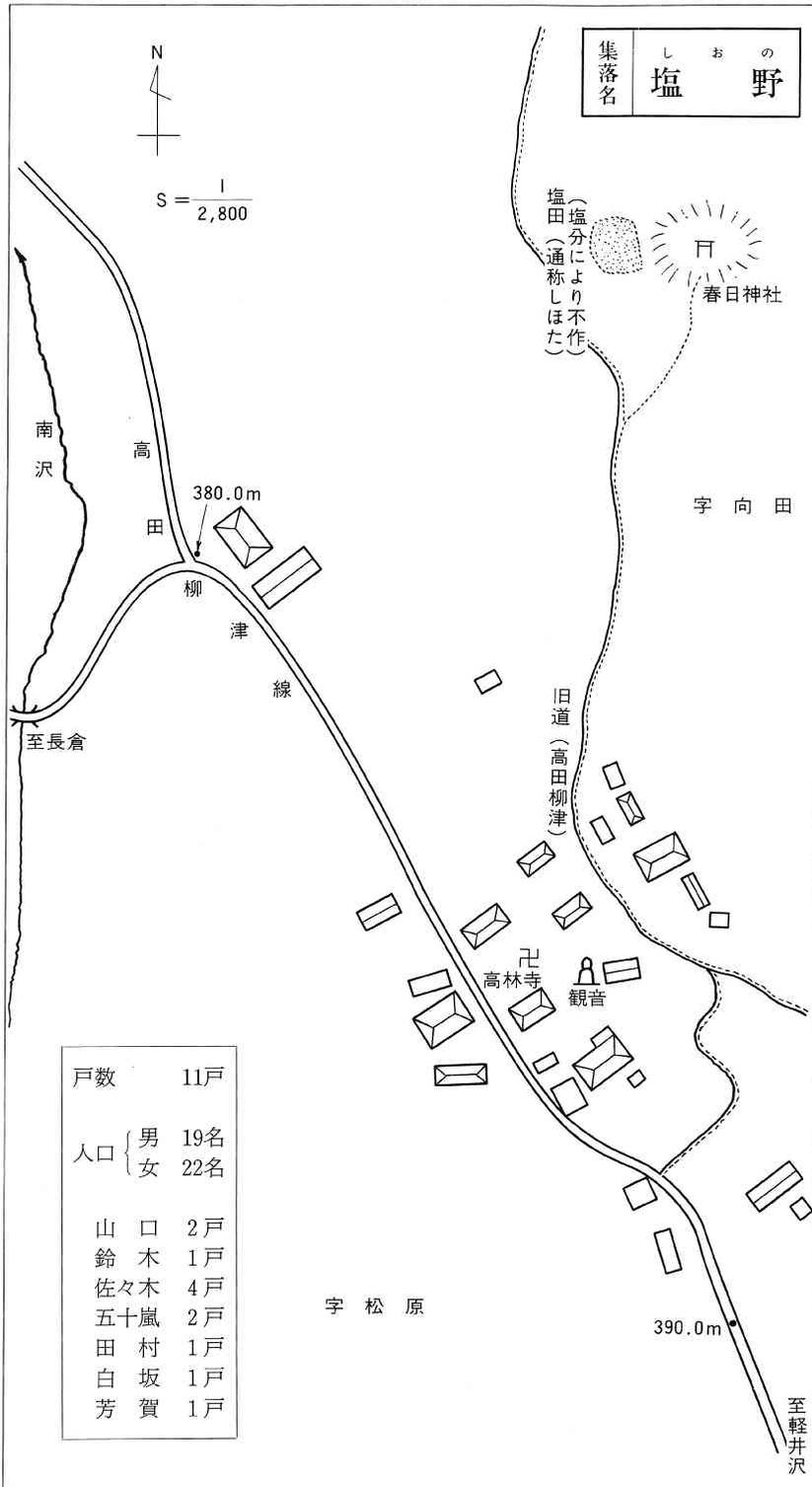
人数 一六五人(男八十六人、女七十九人)

家数 二十六軒(竈二十六)

馬 七疋

綿役金一分。銀四匁九厘

糠菓役金一分。銀七匁一分三厘



足前役 三貫三〇二文
山役金一分。銀三匁二分八厘
漆木一七九六本八分
漆目十七盃九合六勺八才

蛭目七十七貫二七六匁
寺 曹洞宗 高林寺
神社 春日神社

七、軽井沢

(一) 地名と村の変遷

軽井沢は古くは「軽沢」と書き、「カルイサワ」と読んでいたが、東松村の「軽沢」と誤りもあったので「井」の文字を加えたものであろう。



銀山より望む軽井沢の集落

はじめの住みつきが、いつの頃であつたかはわからない。元和年間（一六一五）に軽井沢の農民治右衛門（一書には善吉）が、銀鉞を発見したとあるから、すでに四百年以前頃に住みついていたと考えられる。それ以後は銀山の盛衰と運命をともししてきたのである。特に明治十二年以後

の銀山繁栄のころは、農地を塩野・大谷地・

市野・上平の人々に耕作させ、銀山の上役の

宿屋、銀山の必需品、

生活物資の輸送等の農

外収入が魅力であつた。

このとき農地を他村へ

売却したのは、現在ま

だ軽井沢の人の所有に

帰らないものもあると

いう。寛永年代には高

田組に入れられた。

「銀山峠を背中に負うて

軽井沢とはなんのこと」

と謡われているのをみても、その経過を知ることができる。

天明飢饉の苦労は餓死した人も多かったという。文化五年（一八

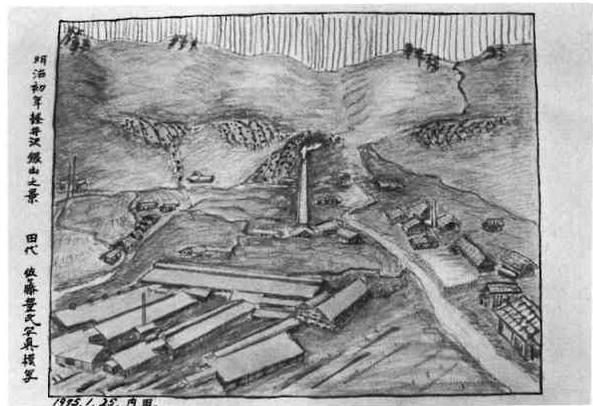
〇八）書上帳をみると、軽井沢村二十六戸、大谷地村七戸、市野村

八戸、上平村十六戸となっている。藩政時代には年貢米のたしに、

また山間僻地の寒村でもあつたので、食糧の自給を考え、沢田の開

拓及水利の便のある地は、水田開拓をした形跡が残存している。特

に低地稲作と用水のためには、宝暦のころに、畑田堰を築いた。



明治20年代の銀山風景画

この適地を指示したのが、椿村肝煎儀右衛門で、工事奉行は有賀三郎であり、この完成までの工事人夫は七六八人であった。長さ七四三間の堰堀をほり下原に導水した。

この当時の堰下水田は三反五畝歩であるが、その後この水下の水田は非常に増反し、現在七〇八ヘクタールに広がった。

また、銀山の栄えたときは、ここへ問屋をおき物資の流通に勤めさせた。佐々木源四郎宅がその業で、いまでも問屋の呼称で昔の面影を表わしている。藤橋の架設のないときは、米・味噌・塩・魚などは、若松から新鶴村を経て運んだ。若松の街道で、大沼・北会津両郡の境界の鶴沼川に銀山橋をかけた。この橋はいまも現存している。このとき塩川と若松から塩を運び、根岸の仲継小舎に貯蔵したので、この小舎の土間は苦汁（にがぢ）で固まりコンクリートのようにになっている。高田からも生活物資を運んでいる。その道は軽井沢から東へ曾根道を通っていたのであるが、明治二十年頃、この曾根道を廃して、洞門を掘り、沢を下って二岐に通ずる道を開いた。

曾根に追分けという地名があり、そこで右は高田・新鶴方面、左は若宮・坂下への道であった。新道の二岐も高田・新鶴の分岐点でここへ旅人休憩の店も開いたのである。

右へ入って中ノ山村を経て赤留峠（中ノ山峠とも）を越して赤留村へおよそ五キロメートルほどあるが、この難所の道路修理人足は銀山道として赤留村で割当られたが、大川の川人足には藩から免除されていた。しかし軽沢村は蟹川橋の冬季の架橋人足は割当られて

いる。洞門は昭和十年ころ風化のため崩壁して、今は洞門のあったことをほとんど気をつく人も少なくなったようである。

文政中期（一八二〇）に五疊敷からの陶土を本郷へ送ることになると、西勝峠（俗に銀山峠）を越して一日何十頭の馬で軽井沢を往還した。その陶土は昭和初期まで続いたので、銀山隆盛時代には、物資を背に百頭以上の荷馬が通過した。特に軽井沢東一里余の新口・北向・弘法清水からは、製錬用石炭の採炭をしたので、一日二回、百頭の馬が必ず通行していた。

村の休茶屋も一〇二軒あったが繁昌し、飲酒のための争もあったという。鉦夫の暴力鎮圧のため伊藤並也という壮漢を依頼し、傍ら肉屋を営み、馬捨場に骨をすてていたのが、昭和初めまで堆積していたのである。

米は自家飯米に不足する位の生産なので、粟・稗・蕎麦・芋類を多作した。焼畑（火野畑）の痕跡があるのはそのためで、その他は麻の栽培が有名である。高田が麻、そして麻柄の多産地として有名なのは、こうした換金作物の軽井沢と端村の後背地があったからである。

寛永十八年に高田組に編入された。そのときあまりにも、高田にある米倉から遠隔地のため、年貢金納と定め物資輸送の労を除くことにした。しかし、その他のものは現物納で、役漆木六二三本、漆六盃余、蟬二十六貫の割当であった。天明三〇四年（一七八三〇四）の飢饉の際にはとても多くの人命を失った。合十村は十ヶ村の集落で

あったが、人口激減して終に五ヶ村となり集落名を「郷戸」と改めた歴史でもわかる。

(二) 銀山閉山と火災

明治二十五年頃と明治二十九年頃の連続大火で被災した。この二回の火災で一回も罹災しなかったのが佐藤作次宅で、用材手法、間取など実に貴重な古民家なのである。二回の火災で焼残った佐藤作次宅は火災復興人足に協力した。

第一回目の火災は銀山閉山直後だったので、まだ経済的余裕もあり、また一方、銀山の古材分與も容易だったが、第二回目の火災には住居建築に相当苦心したという。

明治三十六、七年の凶作にも食糧不足で苦心した。村の稲荷神社に豊作の心願をかけたのもこの時であろう。

また端郷大谷地とは、館山で入相を結んでいた。そのほか会津盆地から、山へ入って薪木、養をとるときは、山手米や山手金も取っていた。今は館山入相契約も行政分離で自然解消している。銀山閉山後、銀山郵便局は軽井沢に移築された。現在の西村氏宅地がそれで、裏の局専用倉庫も最近までそのままであった。



軽井沢銀山の郵便局跡
(窓口枠のみ残る)

(三) 教育

教育は非常に熱心で、銀山小学校に通学した子供も多い。閉山のため閉鎖されると、慶福寺を学校に使用し、更に端郷の折合で二岐に建てた。久保田小学校の分校がこれで、これも腐朽して再び端郷通学を考え、明治四十三年に貉入に分教場を建築した。このとき軽井沢は金一千円の寄附をしている。昭和二十四年には、端郷との行政区分離のため柳津小学校の分校となり、軽井沢作業場に移し、更にここも損傷が甚しいので、昭和二十九年寺地へ近代的な軽井沢分校として誇る立派な校舎が落成した。昭和四十七年には「へき地集会所」も設けられ恵まれた環境である。

(四) 村の神仏

鎮守は稲荷神社である。『新編会津風土記』に、「村ヨリ一町五十間余辰の方山上にあり、草創の年代を伝へず」とある。

稲荷神崇拜は食糧豊稔の祈願なので、この地の人々の願望を知ることができる。この記録には、松平家が鳥居寄進とあり、また伊佐須美神社宮司武井庸も明治中期にこの神社に多大の援助をしている。神域は杉に囲まれた静寂の地である。

また菩提寺は曹洞宗松巖山慶福寺で集落中央の北の山麓にある。天正の時、越後の禅僧によって開山された。本尊は地藏菩薩である。その他にも古くから信仰された仏像が奉安されている。

寺域内に銀山犠牲者の慰霊のため、明治三十九年に建立した地藏

軽井沢慶福寺本尊地藏尊
(沓をはく珍しい彫刻)



尊石像がある。時の住持佐野龍瑞和尚が広く勧進したため、閉山後およそ十年後に漸く落慶している。この慈悲心は尊いものである。また集落中央の道路分岐点には、馬頭観音石像があり、馬の往還の安全を祈願したところ、宮ノ前にあった大切な文化遺産である。そのほか宮ノ前の松の根本には、二十三夜塔があり、この碑は珍らしく半肉彫の御正体である。その他にも小祠がいくつかある。軽井沢を象徴するのに「傘松」があった。老樹となり昭和四十八年枯死したが、ふるさとの風物詩として他郷へ移った人々の心奥に深く刻みこまれた自然樹であったが、惜しいことである。



白衣観音像



銀山犠牲者供養地藏

(五) 三恩人

軽井沢集落で忘れられない人が三人ある。私慾と私財をすてて集落の利害に進んで奮闘した佐藤勘六翁であり、地租改正当時の一筆調査を他の二人と協力して、軽井沢地図を調製した功は大きい。この図は現存している。

このとき問屋の佐々木源四郎宅を大字軽井沢一番地と決めたのも当時の問屋の歴史を尊重したためであろう。

もう一人は佐藤作次という人である。軽井沢二回の大火に、運よくも災を免れた。そのため二回とも炊出しのほか、一戸に九人宛の労力奉仕をしたという。全戸に奉仕終るには、幾年もの歳月を要したという。実に美挙というべきで、被災者への同情と焼残りの果すべき義務とも考えられた尊い行為であったと推察される。

更に新鶴村佐賀瀬川の酒造家の荒井秀吉氏で、酒と生活物資のすべてを銀山に送り販売していた。ところが明治二十九年の急な銀山閉山になると、莫大な物資は銀山の貯蔵所にのこってしまった。荒井秀吉氏はその品々を持ち帰らず、労働収入の皆無となった銀山と軽井沢の人々に無償で寄附を申し出で、必要な品々を各人の希望によって分与した。酒は大正四〜五年頃までここから貰いうけたのである。今でもこのときの苦しさを救助してくれたこの人の徳を村の語り草としてたたえている。軽井沢ではこの美挙に感激し、衆人報恩の議がおこり、全員大賛成で軽井沢共有山林およそ二十町歩の土地と樹木を荒井秀吉氏に贈ったのである。現在この土地の所有名は

移動しているの
である。

この集落の
近代生活は、生
産形態の変化が
波及して、青年
はいろいろな将
来を計画して、

今の世代の責務
を感じて努力し
ているが、将来
の立派な計画が
望まれる。

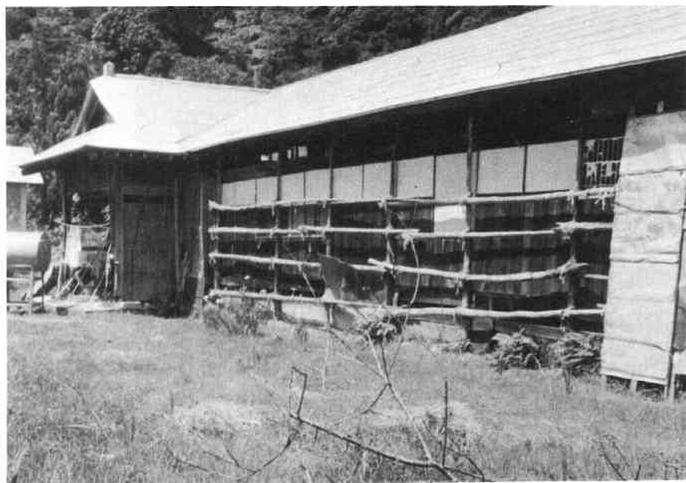
耕地現有水田
九・五一ヘクタ

ール、畑三・二五ヘクタール、山林三十五・三六ヘクタールで、五十三戸二六〇人の人々の両肩にかかっていると思われる。

(六) 学童遭難

軽井沢と塩野の人々及び町民の心いためる事件があった。

昭和三十七年十月十九日柳津小・中学校の児童・生徒五人が、貨物自動車に便乗して、塩野北の大カーブを過ぎたところで、自動車もろとも谷に転落して五人が死亡したところである。いまそこへこの



軽井沢銀山の事務所跡

子供たちの冥福と交通安全守護の地蔵尊と供養塔がたつてある。発起者は軽井沢と塩野の一同となっている。その遭難文を写しておく。

昭和三十七年十月十九日

(表) 供養塔

柳津町長笠間恵書

(裏)

昭和三十七年十月十九日午後五時下校の
砌り貨物自動車に便乗、不幸にして事故
にあい逝去す。痛惜の至り依而供養の為
め篤志寄附により之を建立す。

- 小学五年 新井田夏枝 中学一年 倉本トメ子
 - 小学六年 佐藤 薫 中学三年 倉本 末子
 - 小学六年 佐藤トミ子
- 発起者 軽井沢・塩野両部落一同

(七) 『貞享二年(一六八五)地下万書上帳』の軽井沢

- 大沼郡軽井沢村 葉郷 上平 市野 大谷地
- 一、鎮守祭礼木村と大谷地村は、毎年九月九日定、高田村社人来て祭礼札家並賦る。氏子初尾少々出ス。

一、同端郷上平村市野村鎮守祭礼、毎歳九月十九日高田村社人来て祭礼札家並ニ賦ル。

一、村民産業山多有、薪ヲ樵売て渡世送り端村共ニ同時。

一、当村山へ野手米を出し鉈鎌ヲ持入、馬草萱カクまヲ取村々覚、但馬数ニ究馬壹疋ニ米一升宛取。

一、壹斗五升 中荒井組 本田村

一、貳斗 全 荒田村

一、四斗 全 下荒井村

一、三斗八升 高田組 阿久津村

一、一斗八升 全 根岸中田村

一、一斗七升 全 米沢村

一、早稻十束 全 沖中田村

一、三斗 全 安田村

一、中荒井組蟹川村ヨリ、当村山へ鉈鎌持入馬草カクまヲ取候得トモ、山手ハ不出、其代ニ蟹川村領大川舟橋賃ヲ不出、御城下へ往来ス。

一、端郷市野之村山へ鉈鎌ヲ持入、馬草萱カクまヲ取来村々覚

一、四斗 中荒井組 下荒井村

一、三斗五升 全 宮袋村

一、一斗三升 全 蟹川村

一、一斗八升 全 宮袋新田村

合巻石六升

相場米

一、二斗 中荒井組

松目村

一、二斗七升 全

立行事村

一、一斗九升 全

宮袋村

一、二斗 全

今泉村

一、七斗 全

寺堀村

一、一斗八升 全

十二ヶ新田村

一、一斗八升 全

鷺林村

高田組都合一石五斗

相場米

早稻拾束

中荒井組都合一石五斗七升 相場米

一、端郷上平村山へ御私領中荒井村御蔵入赤留村矢木沢村入相にて

古例山役何成トモ不出。大谷地村ハ入相之処無之。

一、御銀山海道下中川ト云所ニ橋ニケ所有、御材木ヲ被下置。三四

年ニ一度一郷の人足ヲ以古来橋掛ル。

一、本村端郷共ニ諸作物之中ニ麻多作、御年貢上納之助力ニ成、外

ニ粟・稗・蕎麦ヲ多ク作候得共御年貢上納金ニ売買候程ハ無御

座。年中ノ飯料ニ成。

一、高二斗一升五合 曹洞宗松岩山慶福寺

外五斗七升六合 寺免田惣且那先年より寄附之。

都合八斗九升一合之御年貢諸役共ニ惣且那家毎ニ償出之。

一、毎月朔日十五日ヲ遊ビ日ト定、此遊ビ日之儀廿五モ古来召使者

此三日之内ニ山ハゲミシ、身代ノ貯ヲ仕タメ、主人へ佗、毎月

三日之遊ビ日ト定置ト申伝ウ。

一、葛葉取候事、先年ヨリ、川沼郡塩野村秋彼岸前後ヨリ入取、山

御年貢モ不出、塩野村ニテ葛葉取之日定候以後ヨリ入。

一、畑田堰 長サ七百四拾三間 但当前下原ト申処ニ至。

幅並二尺 深サ並二尺五寸

右之堰居村ヨリ辰、稲川領椿木村肝煎儀右衛門サゲスミ、有賀

三助ト申御同心衆奉行ニテ人夫七百六十八人ニテ堀、此堰ヲ当

村当分用所ノ田方、三反五畝程、畑田仕立^ル三石六斗七升モ滿

一、御役漆木六百二十三本

此御役漆

六盃二合三勺五才。

一、御役蠟式拾六貫八百式拾六匁

内

拾三貫百四匁

御年貢蠟

八貫七百三拾六匁

大買蠟

四貫九百八拾六匁

小かいろう

